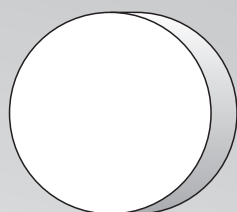
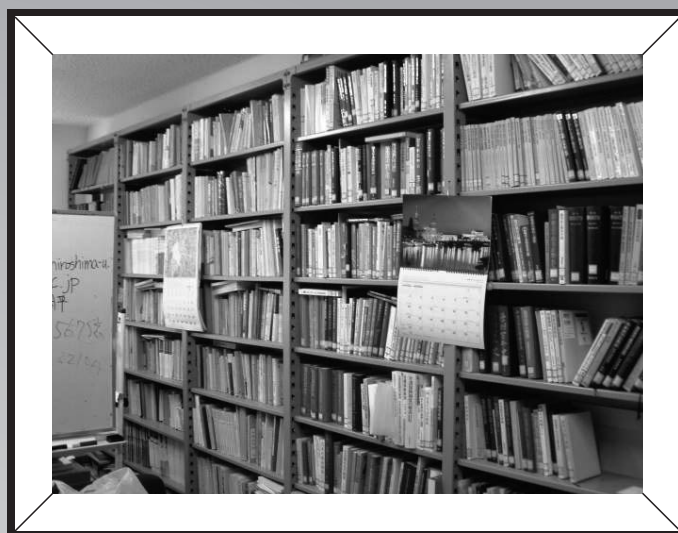


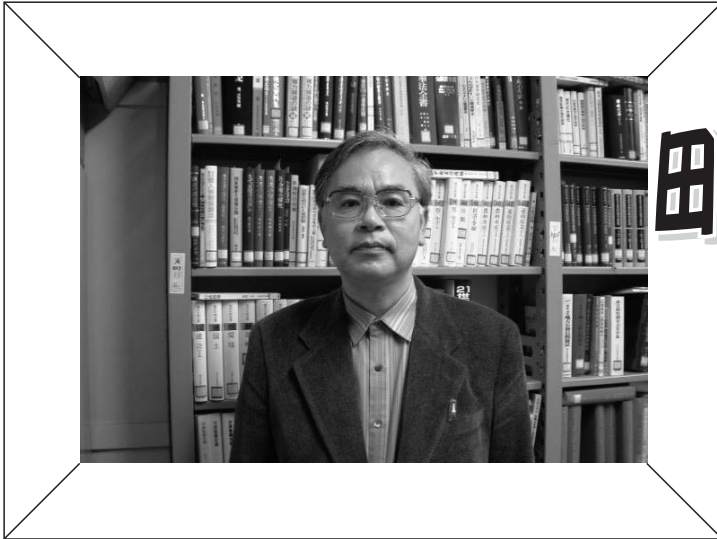
研究室紹介

研究室紹介



Take a quick look...

環境共生科学プログラム	田村和之研究室
地域科学プログラム	友田卓爾研究室
人間科学プログラム	村瀬延哉研究室
言語文化科学プログラム	本田和親研究室
情報行動科学プログラム	江口正晃研究室
創造科学プログラム	清水典明研究室



環境共生科学プログラム

田村和之研究室

教授

部屋番号：A823

メールアドレス：tamura@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：火12：30-13：00

担当授業：教養/ヒロシマ学、日本国憲法、現代法論 専門/現代行政論、現代行政論演習、行政関係法演習

研究内容

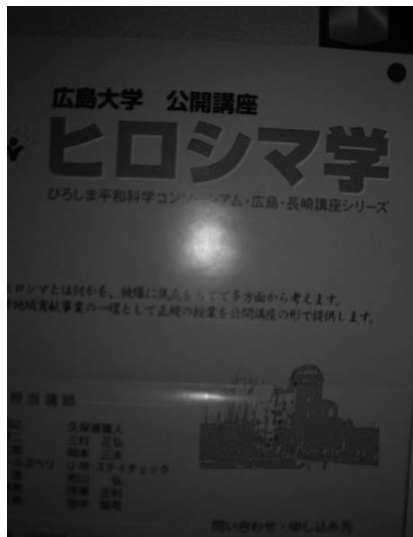
行政法学が専門ですが、主に保育所法制、児童福祉法制や被爆者法制（特に在外被爆者のこと）を研究しています。普通は法学者というのは資料・文献から問題を探すスタイルなのですが、私の場合は現実にはどんな問題があるか人や行政などをまわって調べ、どう解決するかを考えるスタイルで研究しています。言い換えると、参考文献のない（先行研究のない）研究をやってきたということになりますね。

きっかけ

児童・保育所の問題については、自分の子育ての際に、保育所に預けるときの実実と法のギャップなど、実際に体験した問題がきっかけとなりました。

被爆者の問題は、元々関心があったことでしたが、在外被爆者の問題については知りませんでした。そこに、交流のあったケースワーカーの方から、在外被爆者が渡日治療の間は手当をもらえるが、帰国すると手当がもらえなくなるのだが、これはどうしてなのかという相談をもらったのがきっかけでした。調べてみると、法律にはそのような条文はなく、当時の厚生省の通達に

あるのみでした。なぜ法律にないものが通達に書けたのかなどを調べて体系化していただきました。これらの無効なものは違法性があるということ、その後裁判になっていきました。現在は在ブラジルや在アメリカの被爆者の裁判の支援を行っています。



公開講座のパンフレット
(原爆に焦点を当てて、多方面から考えている)

教室では黙っていないで、質問をしてほしい。

学生時代

学部の際はグリーククラブを一番頑張つてやっていました。セカンド・テナーです。今でも出そうとすれば結構声は出ますよ。当時は貧しくて、アルバイトをよくやりました。私たちの時代の学生アルバイトといえば、家庭教師です。大学院の時は、週三日（高校生）やって月額一万円もらい、これと奨学金で暮らしていました。今と比べると、授業料も安く、学生には生活しやすかったですね。

趣味

クラシック音楽を聴くことです。家ではNHK-FMをよくかけています。若い頃は放送される曲ばかりでしたが、最近はCDもよく買って聴きます。なじみやすいものを聴くことが多いです。夏には、ヨーロッパの音楽祭に行ったりもしています。一昨年はザルツブルクでオペラを四つ聴きました。子育ての責任から解放されたので、そんなことをする余裕もできました。



講義で使用している資料。興味深いものが多い

学生に一言

活発性があまりみえませんが。教室では黙っていないで質問をしてほしい。その方が授業も深まるし、理解もできる。質疑も含めて授業なのだからということをお学生にはわかって欲しいですね。

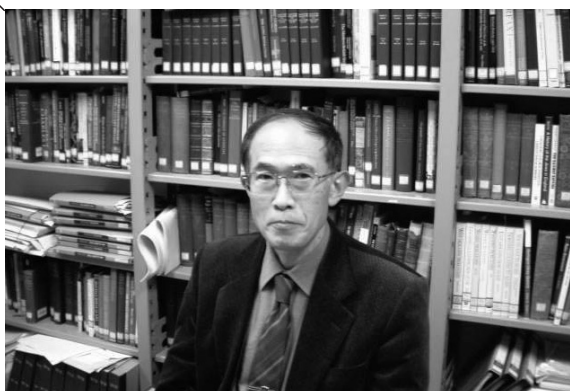
取材を通して

田村先生は二〇〇四年三月で退官されます。教養部で二年間、総合科学部で三十年間の三十二年間広島大学で勤務されました。その間に、現在ニュースにもなっているような、在外被爆者の未払い手当への裁判のきっかけとなられるなど、社会に影響を与えるようなお仕事をされてこられました。三十二年間お疲れ様でした。

(担当 13生 後藤周平)

地域科学プログラム

友田卓爾研究室



教授

部屋番号：A725

メールアドレス：ttomota@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：水/金12：10-13：00

担当授業：教養/ヨーロッパ史、人間の歴史と生活環境 専門/イギリス社会研究、イギリス史研究、イギリス史研究演習、近代世界システム史

研究内容

西洋史学のイギリス近世史を専攻しています。さらに具体的に話すと、ピューリタン革命（一六四〇～一六六〇年）における民衆運動と、民主主義思想について研究しています。この革命（イギリス革命とも言ふ）は、「第一次情報革命」と重なります。革命期には、新聞の他、議会での演説や説教も、印刷出版されました。革命によって、政治文化はどう変化したのか、これが、現在の研究テーマです。

研究を始めたきっかけ

とりわけ強烈なインパクトを受けた、というわけではないのですが、イギリスの「初期独占」について研究されていた恩師の講義の影響を受けました。初期独占に反対し、営業の自由などを要求したのが、ピューリタン革命であり、私は恩師の研究に触発されて、革命そのものを研究してみようと思ったのです。

当時、革命研究者の主要な関心の一つは、自由な出版活動と、討議のもとで、表明された民主主義の諸観念でした。私自身の問題意識も、そこにあったのです。

学生時代

拘束されることが嫌いだったので、部活には参加しませんでした。代わりに、仲間とよくソフトボールをしたり、酒を飲んだり、アルバイトをしたり、また個人では、家庭教師をしたりしました。一年生の頃は友人と読書会を組織して、歴史の本だけでなく、哲学などの本を読みました。二年・三年の頃には遊び癖がつき、勉強はあまりしませんでした。「専門、専門」と言われ、勉強が窮屈になったのかも知れません。三年生の後半に「これではあかんぞ」と思い、自分の進路について考えはじめました。それで、やっぱりこのままではだめだと思い、大学院に進むことに決め、試験を受けました。大学院には、さらに五年間在籍したのですが、そこではよく勉強しましたね。

何かに夢中になること、こだわりの持つことが大切です。

趣味

畑仕事と歩くことです。野菜を育てる魅力は、短期間で結果がでることです。過保護は禁物ですが、愛情を注ぐほど、よく育ちます。一方で、「育てる」ということは、とても難しいことだなあ、と思うこともありますね。子育ては大変難しいですが、野菜作りも同様です。ある時期にいじけてしまつと、その後いくら肥料をあげても、大きくなりません。もちろん、このように失敗することもありますが、やはり、自分で育てた野菜は格別においしいです。旬の野菜は、とても香りがいいし、異なる味がします。これで、はまりましたね。

山歩きでは、友達に教えてもらいながら、山野草の名前を覚えていきます。古い街歩きも好きですね。史跡のある、旧いたずまの街、いわゆる小京都を見て回ります。なぜ、小さな街がいいかという点、昔を想像するのに程よい広さだからでしょうか。専門が歴史学ですし、好奇心も強いのでしよう。

総合科学部三十年を むかえて

総合科学部は、常に改革を宿命づけられてきた学部、絶えず変化をしてきた学部だと思えます。私個人も、何かと変身を求められてきました。それを受身ではなく、主体的に取り組むよう努めたことは、実を結んだと思います。授業では、自分自身が問題意識を持ち、メッセージを発信するよう心がけてきたつもりです。

「総合科学とは何だろう」という難問については、あまり深く考えなくてよいのではないのでしょうか。昔に比べると、現在の学問は、異なる学問の成果や方法を取り入れなければ、成り立ちませんから。ただし、学問のベースになる基礎知識と研究方法は、しっかり身につけなければなりません。学生さんにとって重要なことは、色々な学問の先生方をうまく活用することです。教師一人一人がやっていることは、違っていても、意外と根本ではつながっていますから。オフィスアワー制度などを、大いに活用してください。教官と学生の間相互

学生に一言

関係とコミュニケーションが、最も肝心ではないでしょうか。誇りと信頼関係は、それが民主主義の礎であるように、総科の将来を支えるものだと思います。

何かに夢中になること、こだわりの持つことが大切です。こだわり続けると、それは、色々な方向につながるので、総合科学的になります。こだわりがあれば、いろいろな事に手を広げても、根っこがあるので、うまくつながり、生きてくると思います。

(担当 15生 丸一真実)



人間科学プログラム

村瀬延哉研究室

教授

部屋番号：A522

メールアドレス：murase@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：火12:10-13:10/木12:30-13:10

担当授業：教養/ベーシックフランス語、総合コミュニケーション・フランス語、ヨーロッパ文学の世界 専門/

社会言語システム研究、近代文化研究、上演芸術論演習

研究内容

一七世紀のフランス演劇です。時代背景としては、イギリスの劇作家、シェークスピアが活躍した時代に比較的近く、ヨーロッパの演劇の全盛期でした。具体的には、コルネーユを中心に、ラシーヌ、モリエール等の作品を研究しています。モリエールは市民の日常生活を題材にした喜劇を書いていて、現代の視点から見ても共通性があります。しかし、この時代には、悲劇作品が比較的数量多く上演されました。例えばコルネーユの作品では、古代ギリシアやローマに舞台を移し、愛と名誉との葛藤や、政治的闘争が描かれました。また、ラシーヌは恋愛悲劇を主に描いたのですが、嫉妬の悲劇が大半です。

現在、日本ではこの時代のフランスの作品は上演されていないのが残念です。研究は主に文献を用いて行い、作品と社会背景との関連等にも注目しながら調べています。十七世紀のフランスといえ、随分遠い別世界のように意外と現代に通じる所があり、面白く思います。

コルネイユの作品て??



コルネイユの初期喜劇『法院の回廊』は、裁判所のギャラリーを舞台に展開する若い貴族たちの恋愛劇で、今の日本におきかえれば、六本木ヒルズを舞台にした 트렌ディ・ドラマのようなもの。

——右の写真はアブラム・ボス作の「裁判所のギャラリー」と題された17世紀の版画。パリのノートルダム大聖堂の側にある現在の裁判所は、かつて高等法院と呼ばれ、廊下にはアクセサリーや書店などのブティックが並ぶ当時の人気スポットであった。

コルネイユはこのような日常の風俗から喜劇作品を生み出した。

司法が市民生活に密着したものにできれば、日本の裁判所にもこんなブティックができるかも!?

自分の関心を常に持ちながら生活して欲しいですね

現在の研究を始めたきっかけ

現在の研究は大学院生時代から継続して行っています。学部生時代は、もともと一般に知られた作品を研究していたのですが、大学院に進学し、どうせ研究するのなら、人の真似をするようなことになってもいやだし、人に知られていないものを研究しようと考えたことと、一、二度読んだ作品が面白かったことが、コルネイユ研究を始めたきっかけです。でも、当時は、日本語訳された作品が少なかったため、実際の研究には苦労しました。

学生時代

一年生の間は演劇部に所属していました。しかし、ダンスが苦手でせっかくの役を降ろされてしまいました。その後、退部した後は、友達と酒を飲んだり、本を読んだり、勉強したり、という平凡な生活を送っていました。しかし、大学三年生位になると、学生紛争が盛んになり、テスト前にストライキが起こるなど、実際には平凡

な生活ではなかったかもしれません。

総合科学部三十周年を迎えて

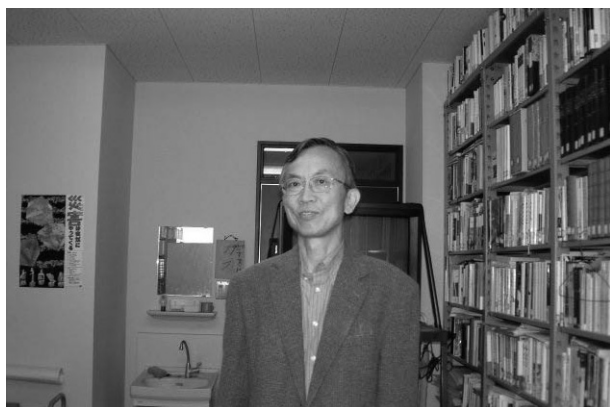
私は昭和五一年から二七年間総合科学部に在籍しています。その当時は景気も良く、東千田にキャンパスがあったこともあり、良く言えば人との交流を図りに、分かり易く言えば酒を飲み、先生や学生たちとよく行きました。気楽な時代でした。就職先の有無を心配せずに済んだというのは、本当に気楽でしたね。

今は就職がとても難しい時代です。ただちに問題の解決に直結するわけではないですが、教官は自分の活動を、研究室内での研究だけでなく、社会的に様々な方向に広げ、学生が社会的体験をするきっかけ作りや環境作りをしていくことが、より求められるのではないのでしょうか。

学生も環境が厳しくなった分、以前より真剣な勉強態度が目立ってきましたし、悲観ばかりせず、逆行を福に転じさせる心構えが何より必要でしょう。

学生に一言

好きなことがあって、それをやるというのがなければ、人生、生きていけません。自分の関心を絶えず持ちながら生活してほしいですね。視点さえしっかり持っていれば、様々な場面で面白いことを見つけられます。いろんなことを吸収して、活かしてほしいですね。



最近文献を中心に研究しています。現代に通じる点を見つけるのは興味深いです。

(担当) 15生 丸一真実



言語文化科学プログラム

本田和親研究室

助教授

部屋番号：A325

メールアドレス：honchan@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：月17:00-18:00火9:00-10:00

担当授業：教養/ベーシックドイツ語 専門/
ドイツ語訳読法演習、地域言語、ドイツ文学
研究、ドイツ文学演習

研究内容

現代ドイツ文学。主にフランツ・カフカ、およびハインリヒ・ベルの研究をやっています。

きっかけ

小学校のころから、貸し本屋によって、学校の登下校中や休み時間に本をよく読んでいました。それが本好きになったきっかけです。

それで、大学も文学部に入学しました。そこで何文をやるか決めるときに、なんとなくドイツ文学が自分に合うかなあと思いました。そのドイツ文学を原文で読んでみたいと思ったことが、ドイツ文学専攻に進もうと思ったきっかけです。もう一つ、そのときのドイツ語の主任教授が高橋義孝さんという有名な人で、その人の翻訳を読んでいたのが、その人がいるドイツ文学専攻に行こうと決めた、というのもあります。

学生時代

勉強は人並みにはやりました。しかし、それ以上に酒に浸っていました。ほとんど毎日飲んでいました(笑)。夏に旅行に行ったり、登山をしたりとそういうこともやりましたが、日常的にはなんと云ってもよく酒を飲んでいました。酒は、あらゆる種類の酒が飲めます。酒を飲むのに親から金をもらうのも気が引けたので、必死でバイトをやりました。家庭教師・夜警など本当に様々なバイトをやりました。就職したときに、収入が減って困ったなあと思ってたぐらいです(笑)。バイト代はほとんど酒に使いました。

酒を通して、人との出会いも多くなりました。もともと飲まなかった自分がなぜそこまで酒を飲むようになったかというところ、高橋義孝先生から「酒を飲まない人間には文学は分からない」と言われたことが関係しています(笑)。それが本当かどうかは別にして、当時、偉い先生だからと、その人の言ったことを真に受けてしまい、「じゃあ、酒を飲まないといけない」と思いついたと記憶しています。その高橋義孝先生も「文壇の横綱」といわれたぐらい酒の強い人で、その先生から「とにかく酒品のよい人間になれ」とよく言われました。面白いのは、酒の席ほど人間が出るところはないということです。私は一緒に酒を飲むと、その相手がどういふタイプの人間であるかということがほとんどわかります(笑)。酒は体で飲むものではなく、頭で飲むものです。体がでかいからといってその分飲める、というわけではないのです。雰囲気によって酔ったり酔わなかったりします。頭で酒を飲む人は、酔いつぶれてはいけなさと判断すれば、酔わないものです。また、私の学生時代は大学のんびりとしたもので、今の広大みたいに「授業は十五回きっちりやりなさい」とか「土曜日に代替授業をきなさい」とかそういう風潮はなかったですね。来年から補講の制度がまた変更するみたいですが、個人的には、今年みたいな制度には反対ですね。一つの学期にここまでやるというのを各先生がもっていて、それを達成できればそれでいいのではないかと、思っています。わざわざ休みだした日の代わりに、土曜日まで学校に出てきて補講するというのはナンセンスだと思います。今年度は決まったことなのでやっていますが。

卒業後に学生時代を振り返って、悔いのないような生活を送ってほしい

趣味

・オーディオ・ビジュアル関係

・料理

・酒(笑)

もともとドイツ映画、ヒトラー関係の番組、ドキュメンタリーなどをビデオに撮っていました。(実際、研究室には様々なオーディオ機器があり、VHSビデオは四千本、八ミリビデオは千本もあります。その一部は、記念にドイツ語科に寄贈する予定です。)最近では、NHKの「プロジェクトX」、「そのとき歴史が動いた」などをほぼ毎回ビデオに収めています。

もともと音楽は好きですが、特にクラシック音楽をよく聴きますね。あと料理をよくしますね。酒を飲みに行き、うまい料理があると、自分でも作ってみたくなります。直接店の人に聞いたりもします。教えてくれない人が多いですけど(笑)。料理は分量を計っているうちはだめ。目分量でやらないと。日常生活でもポピュラーなやつはよく作ります。

学生に一言

学生時代というのは人生の中で最も特殊な期間です。どういふことかという、勉強がもちろん本業だけどころじゃない連中が多いのは確かだが、広大生くらい

はせめて、勉強を本業にしてほしい)それだけでなく、例えば、定年後には自由になって、旅をしたり、好きなことをやったりするけれど、その意味と、いまこの大学生という若い時期に片方では勉強をやりながら、いろんなことをやれる自由な立場にある、ということの意味はまったく違うものであると思うんです。社会に出たら、二ヶ月も夏休みのある会社なんてないですから(笑)。だからこそ、その自由な時間を有効に使ってほしいです。スポーツをやったり、旅をしたり、バイトに精を出すのもよし。何でもいいと思います。何か打ち込めるものを見つけて、それに精一杯打ち込んでほしいです。大学の間というのは、様々な経験ができ、年齢的にそれが一番生きる時期ではないでしょうか。とにかく、一言でいえば、後になって「学生時代あしとけばよかった」と後悔しないような学生時代を送ってほしいです。

総合科学部設立三十年を迎えて

特に感慨はないですね。あえて言う、昔はよく教官同士で酒を飲んでいましたね(笑)。今は車で来る先生が多くなったということもあり、教官同士で酒を飲みに行くということはほとんどないですね。学生に関して言えば、昔は今よりも個性的で破天荒な学生が多

かった気がします。個人的には、画一的な受験競争に原因があると思っています。

就職、特に教職免許について

確かに今は教師にあまりなれない状況です。しかし時代がどう変わるかわかりません(例えば一クラス三十人制を取り入れると教師の需要が増えます)。だから、就職の幅を広げるためにも、教職免許をとっておいたほうがよいのではないかと思います。塾などで仕事に就く際も教職免許を持つておいたほうが有利です。そして、なによりも、教師というのは人に直接影響を与えることのできる数少ない職業の一つなので、会社に就職したら、よっぽど重役にでもならない限り、人に直接影響を与えることは難しいです。私の場合も、親から受けた影響よりも、教師から受けた影響のほうが、はるかに大きかったです。そしてよき教師にめぐり合ったことで、教師を目指しました。それがたまたま大学で教えることになったのは、単なる結果ですね。とにかく先生になったかたは、だから、よき教師との出会いというものが、なによりも重要であると思います。

(担当 15生 樋口浩二)

情報行動科学プログラム

江口正晃研究室



研究内容

端的に言うと、球面などの曲がった空間を変数が動くときの関数の性質を調べる研

教授

部屋番号：C818

メールアドレス：eguchi@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：木16：30-18：00

担当授業：教養/線形代数学、線形代数学演習、数理科学通論 専門/基礎数理演習、数学特別研究、研究指導

究をしています。数学的には地球や頭部表面は球面と考えられます。現在医療現場で利用されているCT（放射線断層撮影）やMRI（磁気共鳴撮影）などはご存知でしょうか。これらは人体に影響を及ぼす放射線を用いて、高価な装置を必要とします。また時間経過を通して、数年前からEIT（電気伝導度撮影法）という電気的性質を利用し、立体的で、時間の経過も分かる三次元の映像を得ることのできる新しい方法が研究され始めました。心臓や肺の動きもとらえることができるようになるかも知れません。今はこれに関わる数学を勉強しています。CTやMRIには1917年に発表されたラドン変換という数学が応用されていますが、これは二十世紀初め頃できた理論です。これらの医療機器や音響製品・携帯電話にも数学や物理などの基礎科学理論が背景となっています。その意味で数学や物理も総合科学の一端を担っているのです。

きっかけ

研究者になったのは、当時開催された日米微分幾何学国際会議でMITのヘルガースン教授の講演内容に興味を持ったことがきっかけです。その後、その時提出された

問題に関することを考え始めました。数学の理論は美しさを持っている、良い理論は美しさを伴うと感動しました。昭和四五年に総科の前身である教養部に赴任してきました。ほぼ同時期に理学部に着任された、世界的に有名な岡本教授に出会い、私が考えていた数学の話をして議論していく中で、これまでうまく行かなかった点に分かり、良い結果を得ることができました。岡本教授に出会えたことはとても幸運でした。

学生時代

大学に入学してすぐに九大フィル交響楽団に入部し、トランペットを奏していました。世代の異なる人や、各学部の先生方とも知り合いになることができ、自分の世界がとて広がりました。また、キャプテンも務めて、そのとりまとめ役をする中でリーダーシップや社会性、協調性などたくさんのことを学ぶことができました。現在は広大合唱団の顧問として、また、学生諸君には授業では学ぶことのできない課外活動にもっと積極的に参加してもらいたいと思って課外活動の支援の仕事もやってきました。本学としても、課外活動が「人間基礎力の育成」に大きな役割を果たしていると考えています。

総科ならではの幅広い人間関係を！

総合科学部設立三十年を迎えて

総科創立の年から二年間、アメリカ、ユーロジャージー州に在る高等研究所に研究員として招かれました。太平洋戦争の頃、ナチスに迫害されていたアインシュタインや数学者達をスタッフとして迎え、博士号を取った若い研究者達を再教育するという目的で設立された研究所です。数学・物理学関係では世界の最も優れた研究所です。総科創設の忙しい時期にも関わらず、快く送りだして下さった今堀学部長を始め、関係の先生方に心から感謝しています。また、国立大学法人化が目前です。本学でも教員の籍が大学院に移るいわゆる大学院講座化が進みましたが、大学院講座化ができないのは総科だけになっていて、総科だけが改革に取り残されてきました。総科の先生方は七つの大学院に別れて担当しており、これが改革の重荷になっているわけです。この問題をどう解決するのか、総科は大きな岐路に立っているわけです。本学の特徴を出すとするれば、広島が瀬戸内海に面し、中

国山地に囲まれているという地域的特性を活かした大学づくりが必要となってきました。総科を中心とする総合系大学院もこのような中で考える必要があると思います。

一方、社会は幅広い教養を備えていて、多角的に物事を見ることのできる視野を持った学生を求めています。その意味で総合科学部の教育理念は今後重要です。日本の大学のシステムは最初から学部学科に分かれており、入学してみたら自分が考えていたものとは異なると思っても進路変更は難しい。また、自分の学びたいことが学べないという不満に思っている諸君も多いでしょう。学びたいことが学べるシステムに変えて行かなくてはならないと、評議会の部会答申でも述べています。今後、この精神は総科でも活かしてほしいと思います。

学生に一言

最近人間関係が狭くなってきたのではないかと危惧しています。ぜひ広い人間関係を作ってください。他のプログラムにも親しい友人がいると、考え方の相違にも触れることができ、自分の世界も広がり

ます。そして、親しい友人達は自分が社会に出たときの大きな支えとなります。このような人間関係は総科ならではです。また、これからの国際化の中で生きていくには、国際的な感覚を養うことも必要です。幸いにも総科には多くの留学生がいます。各国の文化を理解し、相手を尊重し、かつ、自分も主張できるものを持って、お互いに対等な関係を築けるようになってほしいですね。これが世界平和にも通じます。さらに、これは総科に限らずですが、何よりも大事なのは健康です。若いうちに努力して健康な体づくりに励み、いろいろなことに挑戦していきましょう。

最後に、私は今年度いっぱい定年ですが、総科のさらなる発展を願っています。

(担当 15生 御厨由香)

創造科学プログラム

清水典明研究室



助教授

部屋番号：C321

メールアドレス：shimizu@hiroshima-u.ac.jp

オフィスアワー：月～土 7:00-19:00いつでも

ホームページアドレス

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/shimizu/index.html>

担当授業 教養/一般化学、化学実験、化学実験法・同実験、専門/分子細胞生物学

研究内容

一言で言えばガン細胞でのゲノムの不安定性について研究しています。細胞がガン化する過程でゲノムが崩れてしまうことよって増殖に必要な遺伝子や、抗ガン剤が効かなくなる遺伝子の数が増えたりすることがあるんです。遺伝情報というのは生命活動の上で最も重要な設計図ですから、遺伝子の特別な部分だけが増えたり減ったりすることは普通はあり得ないことなのですが、ガン細胞ではよく起こります。しかしこの様な過程は生命が進化していく過程においても同じことが起こっていた可能性があるので。だからこの研究は非常に基礎生物学的側面と、ガンの治療という応用的側面の二つを持っているんです。つまり、今現在の生物の遺伝情報はどのように出来上がってきたか、そして生物がそれをどのように守ってきたか、また遺伝情報はどのようにして壊れるのか、それらの仕組みを理解すればガンというものを解明できると考えています。

きっかけ

僕は大学院の時から多かれ少なかれガンに関係している領域の研究をしていて、卒業してから一度製薬会社に就職して六年近く勤め

ていたのだけれども、その間もガンを一つの視野に入れた開発をしていました。その後、「会社員」をやめて「大学の先生」に転職して、自分の本当に好きな事を研究できるようになった時、ガン細胞の中で特定の遺伝子の数が増えたり減ったりするということを、「これは面白い！」と思い、もう十年以上もそればかり追いかけています。

ちなみに僕は小学校の時の卒業文集で、「大人になったら何になりたいか」というテーマで、「自分は微生物学者になってがんの研究をしたい」と書いていたんです。そして今まさしくそうなっているんですよ。

学生時代

ワンダーフォーゲルで山登りに夢中になっていた時期が長くあり、夏休みは四十日ぐらい山の中にいて仙人の様な生活をしていました。

その一方であの頃は別の意味で勉強を楽しんでいたことが分かるようになった時期でもあるんです。運が良かったのか悪かったのかちよほど学生紛争をやっていた、殆どまともに講義が行われなかったから、毎朝下宿を出て図書館に行つて朝の九時から閉館の時間までずっと自分の好きなことだけ勉強していた、それがすごくおもしろかったんですよ。

何かに向かって一生懸命になっているだけで人間十分じゃないかって思うよね

それまではいわゆる受験勉強ってやつで点を取るための勉強だったから、自分が面白いと思っただけをストリートに勉強していくっていうのはなんて面白んだろうなって思っただけです。

総合科学部設立三十年を迎えて

僕が総科に来て十五年経つから、三十年のうちちょうど半分の間講義をしたり、学生の指導をしたりしてきた訳で、その中で感じたのは基本的に総科の学生さんは非常に質がいいということですね。ちよつと大人しすぎるかもしれないけれど、非常に優秀で社会に出て活躍している人がたくさん出ています。この十五年の間にそういう人を育てるために僕もちよつとだけお手伝い出来たと思っています。一方で先生も非常にすばらしい人がいます。僕自身は、大学では世界に通用するようなトップレベルの研究をしていないと教育は出来るはずがないと考えています。理系では大学院修士まで進むのが普通になりましたが、その場合だと大学で六年間教育を受けることになる。そのうちの半分の三年間を研

究室で過ごすから、研究を通して教育をすることになる。研究を通して教育をするというのは、いい研究をしていないと絶対に出来ない事です。だから僕は優秀な学生を育てて、総科がいい方向に向かうためにはひたすら世界レベルの研究をしていくしかないと思っています。

学生に一言

最近研究室に来てくれる学生さん達はすばらしい学生さんばかりだと思います。それ以外の私が講義している学生さん達も、最近是真的目でやる気のある学生が増えたように思います。世の中が厳しくなっているから、自分がしつかりしなくてはならないという意識が高まっているのかもしれないですね。

ただ、少なくとも一部の総合科学部生は、自分が大学で何をやりたいのか分からないで来たのではないかという気がします。そういう学生は、自分が夢中になれる対象を出来るだけ早く見つけて欲しいと思います。そして、これを一生やっていきたいと思えるような学問分野を見つけられるといいんじゃないかなと思います。

そのためにはまず、たくさん本を読んで勉強する事が大切です。そして次にいろいろな先生の研究室を訪ねて話をすることです。そうすれば何らかの糸口が見えるはずですから、何か自分が面白いと感じたことがあったら、少し勉強してみます。そうすればそれに関連したもつと面白いことが見つかるかもしれない。それが見つかったら、今度はそれについてまた勉強してみます。この繰り返しで、糸を手繰り寄せるようにだんだんと自分が求めているものの本質に近づいていけると思います。

研究をやっている辛いことはありますか？

そりやつらさ！けれども時々すごく面白くてエキサイト出来ることもあります。やっぱり何かに夢中になっているというところに、辛いけれども充実感があるんです。なかなかうまくいかななくて苦労することなんてよくあることですが、何かに向かって一生懸命になっているだけで人間十分じゃないかって思うよね。

(担当 15生 松田詩織)